
静かの海

くろやまねこぞう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かの海

【Nコード】

N9963W

【作者名】

くろやまねこぞう

【あらすじ】

就活に失敗しお先真っ暗の大学生・ユキナリと、転校したてで新しい学校に馴染めない小学生のマサキ。ふとしたことがきっかけで知り合った二人だが、マサキにはユキナリに言えない秘密があつて……。青春の入り口と出口で出会った二人の、成長と密やかな恋の物語。

ブローグ

その人を初めて見たとき

泣いているように見えただ――

「マサキ、もうそろそろおじさんが迎えにくるから、家の外で待ってなさい」

そう急かされ、顔を上げて母親の方を振り向いた。

父親が愛し、自分が生まれ育ったこの家。だけれども、家主を失ったことで、自分たち家族はここを離れ出て行くことになった。

寂しさとも悔しさともつかない気持ちを抱えながら、ぎゅっと手の中にある多孔質の白い石を握りしめる。

家の前でボーツと佇んでいると、ブレーキの音と共に海外製の緑のワゴン車が滑り込んできた。

重いドアを開いて後部座席に乗り込むと、キャンキャンと吠える犬が膝に絡みついてくる。なんとかあやしつけていると、少し送れて母親も助手席に座った。

車がゆっくりと加速していく。行き先は、都心に近い住宅街だ。母親の実家にほど近い場所であり、ここよりもずっと人が多くてにぎやかだと聞いている。

母親は住み慣れた街に戻れることを喜んでいたようだが、自分にとってはまず馴染みがない。

「高速、混んでるかしら」

「五・十日だからちよつと渋滞してたよ。でも、まだ早いからそんなんでもないんじゃない」

大人二人の会話を聞き流しながら、遠く晴れた空に漠然とした不安を感じていた。

小学生（１）

『誠に勝手ですが、事情ご理解の上お聞き入れ下さいますようお願いいたします。よろしくお願いいたします。』

まずはお詫びをお願い申し上げます。

敬具』

そう締めくくられた白い紙をぐしゃりと握りつぶすと、公園のベンチに腰掛けた彼は唇を噛んで俯いた。

吹く風が生ぬるい。本格的に梅雨のシーズンを迎えるまであと少しだろうか。そんなまとわりつくような周りの空気も、彼の気分を一層苛立たせていく。

（何が『敬具』だ、ちくしょう——）

一体自分が何をしたというのだ。脚を棒にして何十社と周り、週末という週末をほぼ会社説明会に宛て、いろんなものを犠牲にして勝ち取ったはずの内定だった。

採用通知が来た日は嬉しくて、何ヶ月も連絡をしていなかった実家にまで電話をかけてしまった。

『アンタ、入ったからにはちゃんと勤めなさいよ』

母は喜びながらそう口にした。まだ入社したわけではないが、内定を貰えばこちらが蹴らない限り入ったも同然だ。もちろん、母親に言われなくても、この不景気の最中せっかく採ってもらった会社だ。ちよつとやそつとのことで辞めるつもりはない。

それなのに、何で——

こんな紙切れ一枚で、その覚悟もすべて霧散してしまった。ここ数ヶ月の努力だけでなく、今までの人生全てが否定された気分になる。

悔しい——けれど、涙の一つも出てこない。

同じような思いをしている学生などごまんといる。そういった者達と傷をなめ合うことができたなら、この気持ちも少しは楽になっただろう。だけれど、四年進級時にすっかり留年をしてしまい、友達のほとんどが既に卒業していった彼にはその痛みを分け合う仲間すらおらず、ただやりきれない想いで砂利を蹴るしかなかった。

ザツと革靴の底が嫌な音を立てた瞬間、下を向いていた視界がふと暗くなった。

「ねえ」

近くで高い声がした。このまま無視しようとしたが、その声の主はもう一度「ねえ」と言った。

しぶしぶと顔を上げる。逆光で最初はよく見えなかったが、シルエットから判断して、どうやら話しかけてきたのは男の子のようだ。目がだんだん馴れてくる。男の子は見た感じ小学校高学年か。さらさらの髪の毛に中性的な顔立ちが特徴的で、これであと二年もしたらアイドル系だと女の子にキヤーキヤー言われそうなタイプだ。それが、迷彩柄のＴシャツに半ズボン、黒の運動靴という幼さのまだたつぷり残った格好をしており、半ズボンから伸びる足は程よく日焼けしていた。

「なんだよ」

胡乱な彼の反応に男の子は少し怯んだような表情を見せたが、すぐに真っ直ぐな視線で彼の目を見て言った。

「お兄さん。うちの犬みなかった？」

「犬？　どんなの？」

「耳が　でさきっぽが折れ曲がってて、茶色と黒の間みたいな色しててこれくらいのこと……」

男の子が手振りつきで一生懸命説明する。が、生憎そのような犬はここに来る前も途中も見かけたことはなかった。

「いや、見てないけど。逃げたの？」

「うん。さっきまで一緒に散歩してたんだけど、信号待ちしてる間にいなくなっちゃって。あいつすごい足早いから……」

そう言つて睫毛を伏せた。可哀想だと思つたが自分にはどうすることもできない。一緒に探してやるほど自分もお人好しではない。

「悪いけど他あたって」と言おうとしたとき、男の子の肩越しに砂場を横切る茶色い影が見えた。

「あ、あれじゃね？」

男の子が振り向く。「あつ！」と声を上げると同時に、見つかったことに気づいた犬がやおら走るスピードを上げた。

犬は男の子の言うとおり、とても逃げ足が速い。男の子が追いかけるが、子供の脚ではとても追いつきそうにない。

一生懸命走る男の子の姿を見て、俄にくすぶっていたプライドに火がついた。

「元野球部なめんなよ！」

彼は急に立ち上がってそう宣言すると、犬の方に向かって駆けだ

した。スーツの下に革靴なので多少動きづらいが、それでも持てる限りの力を出す。

犬が池の前で急に進路を変える。それを見越して彼はショートカットして犬に飛びつく。リードが手に触れる。あともう少し。

「よっしゃー!!」

ずざーっと地面に転がりながら、間一髪のところまでリードを捕まえた。首輪を引っ張られた犬が情けない鳴き声を出して立ち止まった。

犬がワンワンと吠えながら今度は彼にじゃれついてきた。まったく、変わり身の早い犬だ。

「すみません、大丈夫ですか!？」

パタパタと追いついてきた男の子が青い顔をして彼に尋ねた。服は汚れてしまったが払えば何ともないし、こんな子供に心配してもらうのも決まりが悪い。

「いや、大丈夫大丈夫」

そう言ってリードを男の子に渡した。久々の全力疾走は、疲れたがなんとも気持ちよかった。少し、気分も軽くなった気がする。

「今度は、離さないようにしなきゃダメだぞ」

立ち上がって男の子の頭をぽんぽんと撫でた。夕方6時のチャイムが遠くに聞こえる。

さて、自分もそろそろ帰るか、と伸びをしたとき、男の子が不安げに口を開いた。

「お兄さん、大井戸町ってどっち？」

「大井戸？　ここから結構あるぞ」

聞いてぎょつとした。今いる公園からだ、大人の自分でも歩いてたつぷり30分近くはかかるだろう。

男の子はバツが悪そうに呟いた。

「散歩させてたら、迷っちゃって」

……土地勘のない子なのだろうか。

言葉で説明しても伝わりにくいだろうし、ちょうど自分の家も同じ方面だ。それに、日も暮れかかっているのに小さな子をひとりで歩かせるのは危険かもしれない。

「しょうがねーな……。……近くまで、送ってやるよ」

2、3回首を回してからそう言つと、男の子の肩を押して歩き始めた。

地面には小さな影と大きな影、それに挟まれた犬の影が長く伸びていた。

小学生（2）

大井戸町まで帰る途中で、犬が道にしゃがんだまま急に一步も動かなくなってしまった。

口笛を吹いても置いてけぼりにするそぶりを見せても一向に動かない。男の子は「またか」とため息をついた。

「どうしたんだ？」

「こいつ、いつもこうなんだ」

そう言っつて男の子は細い腕で犬を持ち上げた。少し大きな小型犬ぐらいのサイズだったが、子供の体力では抱えたまま歩き続けるのはいかにも大変そうだ。しかも、まだ道のりは半分ぐらいまでしか来ていない。

「貸して」と言っつて犬を男の子から奪った。柴とビーグルの雑種だというそれは、近くで見ると愛嬌の良さと凛々しさが絶妙なバランスだった。

犬を抱っこしながらニヤニヤしていると、男の子が不思議そうに聞いてきた。

「お兄さん、犬好きなの？」

「ああ。実家にはもうじじいの犬が二匹いてさ、どっちも雑種でブサイクなんだけどそれがもうすげー可愛いだよ。それで、小さい頃は獣医になりたかったな」

実家の犬が吐血して倒れたとき、あまりにも心配で「大きくなったら絶対に自分が治す」と心に誓った。そしてしばらくは本気でそちのほうに進路を決めようとしていたのだが。

男の子が当然のごとく疑問をぶつけてきた。

「なんでなんなかったの？」

「俺、猫アレルギーなんだ」

近所の猫が家に入ってきたとき、目は涙で一杯になるわ、体中は痒くなるわで大変な思いをした。それ以来、猫は自分にとって天敵である。

「そつか。獣医さんそこには猫もいっぱいくるもんね」

「だろ。だから俺は諦めた」

そうでなくても獣医になるのは非常に狭き門をくぐらなくてはならないと後々知るのだが……。その辺は小さい子に説明しても解らないだろうと思い、省略した。

今度はこちらから男の子に質問する。

「名前なんていうんだ？」

「名前？ ガリレオだよ」

「犬じゃなくて、お前だよ」

「あー……、え、と」

男の子は一瞬口ごもってから、小さな声で呟いた。

「まさき」

言うのをためらったからどんな変な名前なのかと思いきや、案外普通に拍子抜けした。

「マサキか。なかなか渋くていい名前だな」

最近はやや奇抜な名前を付ける親も多いと聞くが、それなりにきちんとした家の子なんだろう。そういえば、自分に敬語は使わないものの、しゃべり方もこれぐらいの歳の子にしては落ち着いている。

「お兄さんは？」

「俺？ 俺はユキナリ。行くに成るって書いて行成」

「何やってる人？」

「大学生だよ」

彼の言葉に、マサキはびくりしたように目を見開いて、そのあとくすくすと笑いながら言った。

「へー、そうなんだ。ネクタイしめてるから働いてる人かと思ってた」

そう言われ、自分がスーツを着ている理由を不意に思い出した。

今日は以前お世話になった講師の学会発表があったのだ。出掛けにポストを覗いたら内定先からの手紙が入っていたので鞆に放り込み、帰りに内容を読んでみた。あのザマだ。

就職が決まったことを恩師に伝えると、それはもう喜んでくれた。あの笑顔も自分は裏切ることになってしまった。しかも、学会では昔付き合っていた女が他の男と仲良くやっている様まで見てしまった。

今日は人生最悪の日だ――、そう思っていた。

けれど今は、何故か心がそんなに重くない。

（やっぱ子供と動物の癒しパワーってすげえな。）

あどけないマサキの横顔を伺いながら、彼はそうしみじみと感

じ入った。

早々にシャッターを下ろしてしまった簡易郵便局の前で、マサキは立ち止まった。

「もうすぐそこだから、ココまでいいよ」

ふと見ると、電信柱の住所表示にも「大井戸町」と書いてある。やっと近くまで来たようだ。

「そっか。今日は大変だったな」

犬をマサキに受け渡す。「おっと」と言いながら抱え直すと、マサキは勢いよくこちらに向かって頭を下げた。

「あ、あの、ありがとうございます」

急に礼儀正しくなる。そんなマサキがおかしくてちょっと笑ってしまった。

「じゃ、またいつかどこかで会おうな」

「うん、またね。本当にありがとう!」

そう手を振りながら、二人は別の道を歩き出した。

小学生（3）

二つめの角を曲がると、見慣れた自宅の外灯が目に入った。

犬のリードを玄関の支柱に繋ぎ、特にチャイムを押すこともなくドアを開ける。

「ただいま」と呼びかけると、台所から母親が顔だけ出して言った。

「遅かったじゃない。おじさんもう来てるわよ」

それは玄関に男物の靴があるから知っている。リビングへ向かうと、叔父がソファにもたれかかりながら、ワイシャツを着たままビールを飲んでいた。

「おじさん、ガリレオ散歩させてきたよ」

「おー、すまんな。ありがとう」

ガリレオはもともと叔父の犬である。ここ1週間出張で家を空けるとのことで、叔父の姉である母親が預かっていた。

「ほら、お礼だ」と言つて出張先の名産であるカスタードまんじゅうを受け取った。椅子に座つてもぐもぐと食べていると、母親が追加のビールをもう一本持つてきた。

叔父はビールの栓を抜きながら言った。

「どうだ、マー坊、友達100人ぐらいできたか？　好きな子のひとりやふたりいるんだろう？」

唐突な質問に心臓が跳ねる。顔が赤くなってくる。そんな様子を、

叔父はにたにたとしながら見ていた。

まんじゅうを気管につまらせそうになりながら飲み込むと、しどろもどろの体で言った。

「あ……、そうだ、宿題やんなきゃ！」

椅子から飛び降りて、急いで階段を駆け上る。ボタン！とドアが閉まる音が聞こえると、リビングに居た母親は大きくため息をついた。

「忠晴、あの子に変なこと言わないでよ。なかなか友達できなくてへこんでるみたいなんだから」

4月に転入してきて2ヶ月経つというのに、一向に学校での様子や友達の話をしてこない。そんな自分の子供に、彼女は日々心を痛めていた。

「おお、すまんすまん」

「それに、マー坊って止めてって言うてるでしょう」

「でも、呼びやすくして」と受け流そうとする弟に、彼女は「本当に勘弁してよ……」と涙ながらに言った。

「あの子……、真咲はちゃんとした女の子なんだから。あの子もアンタも、どうかしてるわ……」

真咲は自分の部屋に戻ると、窓を開けて空を見上げた。
紫がかった西の方の空に、葉っぱのように細い月が引っかかって
いる。

ベッドサイドに置いた石を手のひらで包むと、心の中で月に向か
って呼びかけた。

（お父さん、今日は聞こえる？）

去年、病気でその短い命に幕を下ろした父親。父は息を引き取る
直前に、死期が近いのを勘づいていたのか、末の娘である真咲に向
かってこんな事を言った。

『真咲、もしお父さんがいなくなっても、お父さんはずっと真咲の
ことを遠くから見てるからね』

遠くってどこ？ と尋ねると、『そうだね、お月様ぐらいかな』
とはにかんで笑った。

『月に行ったらもう会えないよ』

そうぐずる真咲に、父はこの石を手渡したのだ。

『なにこれ？』

『月の石だよ。お父さんはそれを取ってちゃんと帰ってきた』

しかもそれを持っていると月にいる人と会話ができるんだよ、と。
嘘みたいな話だ、と思った。それから幾ばくもしないうちに、父
親は本当に天へと旅立ってしまった。

母親を心配させたくなくて、皆の前で涙を見せることはなかった。

けれど、一人になるとあの優しい笑顔を見られないことが淋しくて、目が解けるほど泣いた。

そんな中、父からもらった月の石のことを思い出した。魔法や奇跡を信じる歳でも無くなっていたが、万が一にも本当に父と会話ができるのならば、試す価値はある気がした。

（お父さん）

呼びかけると、『なに？』という穏やかな声が耳を掠めた。微かだが、確かに聞こえた。

月にいる父親も、こちらで生きていたところと同じように忙しいのか、話しかけても答えが返ってこない日もあった。だけど、こちらに引越してからはいたい毎日現れている。

いつしか真咲にとって、毎晩月に祈ることは日課となっていた。

（お父さん、今日、変な人に会ったよ）

今日はあまり用事がないのか、『へえ、どんな人？』とすぐに返事がきた。

（男の人のくせに色が白くて、目がへ音記号よこにしたみたいな形で、口が猫みたいに真ん中がとがってて……）

『ふんふん、そうなんだ』

（でもそのくせ猫がダメなんだって。それで、最初、ベンチに座って下向いてるから、大人なのに泣いてるのかと思った）

『で、どうしたの？』

（気になって話しかけたら、ちょっと怒ってるみたいやしやべり方だったからびっくりした。……けど、すごい親切だったよ）

『そうか。いい人だったんだね』

思い出すだけで心がむずむずする。ガリレオをダイビングキャッチしたところも、「しょーがねーなあ」と言いつつ肩に触れた手が優しくかったことも、犬を抱っこしながら幸せそうに笑っていたことも……。大人の人があんなにくるくる表情を変えるのなんて、今まで全然知らなかったから、馴れないことに心臓はばくばくいっぱいだったんだ。

またどこかで、と別れ際に言った。あの時彼はどういっつもりで言ったのかわからないけれど、少なくとも自分は本心から言っていた。

（もう一回会えたらいいな）

そう願った真咲に、心の中の父は『それはお父さんに言われても分からないよ』と穏やかに笑った。

藍色（１）

きっかけは、父方の祖父母がくれたランドセルのように思う。

それまで真咲は、大人しくて目立たない普通の子供だった。年の離れた兄弟は物心も十分ついたころにできた小さな妹に対して感心が薄く、母親は手のかからない子なのを幸いに、真咲が就学する前から仕事に復帰していた。

「真咲、おじいちゃんおばあちゃんからプレゼントだよ」「」

小学校に上がる直前、彼女は自分宛に届いた包みをあけてびっくりした。そこには、青色とも黒ともつかない不思議な色合いのランドセルが入っていたからだ。

「きれいな色だね」

「ホントだ。お父さんも大好きな色だ」

父親はそう言って「これは藍色って言うんだよ」と真咲に教えた。あいいろ、あいいろ……。耳慣れない響きだったが口に出すと心地よく、また難しい言葉を知ったことで少しだけ大人になった気がした。

今になって思うと、祖父母があのような色を選んでしまったのは、真咲の性別を一つ下の従兄弟と間違えていたのかもしれない。母親は「女の子なのにこんな色を使うのなんて可哀想」と送り返そうとしたが、父は本人が気に入っているのだから、とそれに反対した。

結局真咲の「どうしてもこれがいい」という駄々により、母親が折れた形になり、入学式には喜び勇んでそのランドセルを背負い校門をくぐった。

幸い、入学した小学校には保育園からの見知った顔も多く、また

そこそこ田舎でおおらかな土地柄だったため、真咲のことをランドセルの色でいじめるような者は一人もいなかった。むしろ、「珍しいね」と言われてすこし得意になったりもした。

それから真咲は髪を切った。小学校に入り行動範囲が広がると、もともと女の子同士がするようなお人形遊びが得意ではなく、野山をかけずり回る方が性に合っていることに気づいたからだ。洗うのも乾かすのも、短い髪は楽である。そして着る服も、より動きやすいもの、汚れが目立たないものを多く選ぶようになっていた。

そんな真咲の変化に母親はあまりいい顔をしなかったが、真咲は別に悪さをするでもなく肝心の勉強には真面目で、近所の子を持つ親から「優秀でうらやましい」と褒められる。自身も忙しくて構ってやれないことが多い手前、娘に強いことを言える立場になかったのだろう。

気が付くと真咲の外見は、同年代の男の子のそれとほとんど変わらなくなっていた。

そんな様に、ちょっと風変わりながらものんびり育っていた真咲だが、ある時期を境に生活は一変する。

有能な外科医だった父親の死。もともと都会育ちのお嬢さん気質だった母親は、田舎の暮らしにどうしても馴染めず、真咲をつれて実家へ帰ると言い出したのだ。

上の二人の子供は進学や就職ですでに家を出ている。それに、亡き夫にして土地の人間というわけではなく、たまたま待遇の良い病院があつたためそこに赴任してきたに過ぎない。

真咲が小学校の六年にあがるのを機に、母娘は街を離れた。

「せめてあと1年、みんなと一緒に卒業したい」——真咲の願いは聞き入れなかった。

真咲が新しく入ったのは、都内でも比較的裕福な家庭の集まる地域の公立小学校だった。周辺の学校に比べ荒れている者は少なかったが、その分どこか余所者を寄せ付けないプライドのようなものを感じた。

真咲は地方からやって来たにもかかわらず、素朴な雰囲気がなく、どちらかというと醒めていて勉強もできる。それに加え服装はまるで男子のようで女子とはつるむ心配がない。

クラスのリーダー格の女子に「生意気」「変人」と目を付けられるのも時間の問題だった。

他の児童達にもそういった空気は瞬時に伝染する。担任の教師に「真咲ちゃんのことよろしく頼んだよ」と言われた学級委員の子とその友達のみ、教室移動や給食の際などに真咲に話しかけていたが、リーダー格の女子の顔を伺っているのか、明らかに腫れ物を触るような扱いでしかなかった。

「真咲ちゃん、あたし、これからバトン部の練習だから」

帰りの会が終わると、学級委員の子が「だから、ごめんね」と首を傾げながら言った。けどもうそんなの言われなくても分かっている。彼女はいつも部活や塾があつて、一緒に帰ったことなどこれまで一度もない。もしかしたら断る為の嘘なのかもしれないが、そんなの確かめたって何にもならない。

（まあ、仕方ないんだけどね……）

藍色のランドセルを背負うと、昇降口で運動靴に履き替え、鈍色の空を見上げてため息をついた。今さら服装の趣味を変えることもできず、愛想良く振る舞えない自分が悪いのだから。それに中学は母親の期待する私立の学校に進学する予定だ。泣いても笑ってもあと数ヶ月。そう思えば我慢できる。

だけど、きやあきやあと楽しそうにじゃれ合いながら下校する児童の群れを見ていると、なんとなくやりきれなくなってくる。自分だって地元にいればあの中にいられたはずなのに。

（みんな、どうしてるかな……）

懐かしい友達の面々を思い出しかけたところで、鼻先にポツン、と冷たいものを感じた。

（――雨だ）

そう思ったが早いか、雨足は急激に強さを増してきた。やばい、と傘を持っていない真咲は、近くの屋根付きのバス停へと逃げ込んだ。

薄いプラスチックの屋根をドタドタと激しい雨が打ち付ける。「そついえばお母さんが朝傘持って言って言ってたな」と思い出すがもう遅い。どうすることもできないまま、真咲はバス停に佇んだ。

雨はいつ止むとも知れない。遠くの空を睨むが雲の切れ目はまったく見えない。途方に暮れていると、目の前に一台のバスがゆっくりと滑り込んできた。

ぎゅうぎゅう詰めの中車内から、一人、二人と乗客が降りてくる。客はバスに乗ろうとしない真咲のことをすれ違い様に奇異な目で見ていったが、すぐに傘を開くと興味が失せたように歩き出した。

バスは乗る人もいないのになかなか発車しない。どうしたんだろう、と見ていると最後一人の客がやつとはき出された。その客は長

い手足をよろめかせて地面に降り立つと、バス停にいた真咲の顔を見て「あっ!」と言った。

「お前、この前の……」

彼の方は名前が出てこないようだが、真咲はよく覚えている。

（ユキナリ、だ）

けれども、驚きすぎた真咲には声を出すことができなかった。

藍色（２）

郵便局の前で別れてから、一緒に歩いた時のことを何度も何度も繰り返し思い出してきた。その度に、「もう一度会えたらいいな」などとぼんやり願っていた。

だけど、名字も連絡先も分からない。「近くに住んでいる大学生」ならごまんというだろう。隣に住んでいる人の顔すら知らないこともあるこの時代だ。再び出会うことなど奇跡に等しい、そう思っていたが……。

（どうしよう、本当にまた会えた）

今日の行成はネクタイを締めていないせいか、以前会った時よりもずっと若く見えた。もともと童顔っぽい造りもあり、顔だけ見れば高校生と言っても通用しそうだ。

自分の顔を見上げたまま固まってしまった真咲に、行成は首を傾げながら尋ねた。

「お前、こんなところでどうしたの？」

真咲はかさつく喉から、声を絞り出して答えた。

「あ、あの、急に雨ふってきたから、雨宿り」

「ああ。傘がないのね」

真咲の両手は空いていて、シャツは端々が濡れて変色している。そんな姿を見て、行成は納得したように頷いた。

「俺んちすぐそこだから、傘もう一本持つてくるよ。貸してやつから」

後ろの方を指さした行成に、真咲はぶんぶんと首を振った。

「でも、今日カギも忘れちゃってて家に入れないんだ」

先ほどポケットの中に手をつ突っ込んだら、いつも持っているはずのカギが見あたらなかった。晴れていれば庭にある脚立でも使って開いてる二階の窓からでも侵入するところだが、この雨ではそうもいかないだろう。

「家族は？」

「いない。みんな出掛けてる」

母親は6時過ぎにならなければ帰って来ないし、本宅の祖父母も今日は町内会の旅行で出掛けてしまっている。どのみち、雨が止むまで待つしかないのだ。

すると行成は、「ふーん」とあまりヒゲの生えてない顎を撫でながら言った。

「そんじゃ、さ。ちよっとお前うち来る？」

「えっ」と真咲は目を円くする。

思ってもいない申し出に頭が混乱し始める。よく知らない人に着いていつてはいけないと言われているが、どこをどうとつてもこの人が悪人だとは思えない。だけど、一応自分は女子だしもし万が一下心があつたとしたら……などと考えがぐるぐる回る。

どう答えていいかわからずしどろもどろになっていると、行成は「へっ」と少し情けなさそうに笑った。

「バイトでやってるテストの採点なんだけど、結構量あるから手伝ってほしいんだわ。もちろん、なんかお礼はするからさ」

そう頼まれて心がぐらりと動いた。この前助けてもらった借りがある手前、断ることはできない気がした。

……というのは建前で、本当はこのお兄さんがどんな生活をするのか、非常に興味があったからだ。

真咲が「うん」と頷くと、行成は「おう、じゃすぐとってくるな」と言って傘を開いてバス停を出た。

雨はまだ、止みそうにない。

藍色（3）

行成はものの5分ぐらいでバス停へと戻ってきた。本当にこの近くに住んでいるようだ。

ビニール傘を手渡され、水たまりを踏まないよう気をつけながら歩く。途中、同じ学校の誰かに見られやしないかとびくびくしたが、そんなことを思っている間にアパートへとすぐ着いてしまった。

表札に右下がりの可愛い字で「矢野」と書いてある。彼のフルネームは「矢野行成」だと知った。

「汚いけど、ま、上がってよ」

行成について玄関で靴を脱ぐ。

外観は古びていてお世辞にもあまり立派とは言えなかったが、その分部屋の中は案外広々としていた。台所も二口コンロがちゃんと設置しており、深い流しはきれいに磨かれていた。飲み干したビールの缶がゴミ袋いっぱい詰まっているのが、「らしい」といえるらしい。

台所とガラスの引き戸で区切られた部屋の中は、たくさんの本や服などで散らかってはいたが、不潔な印象はなかった。だけれども畳に敷きっぱなしになっている布団と、その上に脱ぎ散らかしたTシャツとぐしゃぐしゃに丸められた肌掛けが放置されているのが目に入ったとき、何故だか見てはいけないものを見た気がしてドキツとした。

「これで体を拭け」とタオルを差し出されたので、ありがたく使わせてもらう。紺色の無地のタオルは、柔軟剤の強い花の香りがした。

部屋の真ん中に置かれたテーブルの前に正座すると、向かい側に

座った行成が、裏地がオレンジ色の黒いてかてかした生地 of 鞆の中から紙の束を取り出し、それをドサツとテーブルの上に置いた。その1枚目を真咲に向かって差し出すと、濃いピンク色の水性ペンで右端を指し示しながら言った。

「この欄の点数、全部足して上に書いて」

真咲が任されたのは、大問ごとに出された点数の、最終的な合計を出すことだったようだ。これは間違えられないぞ、と妙に気合いが入る。

電卓をつかうかどうか聞かれたので、「いい」と首を振る。二桁同士の足し算ぐらいなら暗算でもできるし、その方が早い。

雨音が響く中、黙々と作業を進める。途中で行成がやっている正誤判定に追いついてしまったので、小問の合計も真咲がやることになった。

「終わったよ」と声を掛けると、点数を表に書き込んでいた行成が顔を上げてこちらを見た。

「おお、サンキュ。助かったよ」

屈託のない少年のような笑顔。見ていると言いようもなく落ち着かなくなってくる。

行成は「……いしょ」と言って立ち上がると、首をぐりぐりと動かしながら尋ねてきた。

「あのさあ、ホットケーキ好き？」

うん、と頷く。たいていの甘いものは好きだが、ホットケーキは格別だ。……と言うか、世の中にホットケーキを嫌いな人なんてい

るんだろつか、と真咲は思う。

すると行成は流しの下扉を開けて、大型のボウルとかき混ぜ器、それと冷蔵庫から牛乳と卵、粉などを取り出した。

「俺、これだけは作るの上手いんだ。実物見てビビんなよ」

そう豪語すると材料を次々に量っては混ぜていく。真咲は横でその様子をボーツとして見ていた。

やけにあっさり混ぜ終わったな、と思ったら、今度は手慣れた様子でフライパンを温めだした。「マサキ、お茶の用意して」と言われたので、ヤカンに水を汲んでもう一つのコンロに置いた。

皿を用意したりテーブルの上を片付けたりしていると、いつの間にかホットケーキが焼き上がったようだ。

どん、と黒い皿の上につけられたきつね色のケーキを見て、真咲は思わず「わぁっ！」と声を上げた。

「すごい、これどうやって作ったの？」

まるでパッケージの見本の様である。表面はつるつるとしていて穴がほとんど開いておらず、型でも使ったかのように分厚い。自分で何度か作ったこともあるが、このように完璧に近い形で焼き上がったことなどまずない。

「あんまり混ぜすぎないのがポイントかな。あとは弱火でじっくり焼くこと」

行成が得意げに答える。しばらく出来映えを眺めていると、行成は「そんなにか？」と苦笑してそれをナイフで二つに分けてしまった。

片方を別の皿につける。バターをその上に落としてから、行成

がこちらを見た。

「はい」

ごく自然に大きい方を差し出されたので、真咲は「いいよ、そっちもらつよ」と断った。すると彼は早々にケーキをパクつきながら言った。

「男同士で遠慮なんかすんなよ。たくさん食わねーと大きくなれねーぞ」

……やっぱりな、と真咲は思った。行成は自分の性別を誤解している。初めて会ったときから異性に対するには（いくら子供とはいえ）ぞんざいな態度だとは思っていたが、それは同性に対する気安さから来るものだったらしい。

確かに自分の服装は男の子に見えなくもないが、それでも半分ぐらいの人はちゃんと気づく。それなのにこの人は、自分が男子児童だと信じて疑いもしていないようだ。今日のランドセル姿を見て決定的になったのかもしれない。

だからといって今ここで訂正するのも……と思う。自分が女だと知ったら妙な空気になりそうだし、ヘタしたらこのまま追い出されかねない。外はまだ雨が降っている。せめて今日ここから出るまでは知らんぷりを通しておくことに決めた。

「ユキナリさん」

「あ？」

「ホットケーキ美味しいね」

にこにこしながらそう言うと言行成も同じように頷いた。

穏やかな時間が流れる。行成が幸せそうにモノを食べる様子を見

ていると、こちらの心まで暖かくなっていくようだ。
騙している、という気持ちは少しもなかった。

藍色（４）

行成が食器を洗っている間、手持ち無沙汰になり部屋の中を見回した。

そこで、机の脇の壁に貼ってあった図面に目がとまった。

大きな月の写真だ。さっきまでは背中を向けていたので貼っていることに気が付かなかった。夜空に浮かんでいるそれには、各クレーターごとに線がひっぱってあって英語で名前が書いてある。

何気なくとそれを見てみると、いつの間にか洗い物を終えたらしい行成がすぐ後ろに立っていた。

「なに、これが気になる？」

こんなものに興味を持つとは珍しい、と言わんばかりの口調だった。

真咲は頷くと、静かに答えた。

「……月にはうちの父さんが住んでるんだ」

バカにされる、とは思わなかった。この人は、きっと話を聞してくれる。

案の定、行成は「はて」と首を傾げると、真咲に向かって大真面目に尋ねてきた。

「どついうこと？ オヤジ、宇宙飛行士なの？」

首を横に振る。

「去年、死んじゃったんだけど、亡くなる直前に『月に行ってくる』って言ってたんだ」

行成は一瞬顔を強ばらせたが、すぐに「ああ」と相づちを打って話の続きを促した。

「で、前まで住んでた所引き払って4月にこっち来たばかりだから、この前は迷っちゃって……」

「なるほどな。で、マサキ、兄弟は？」

「いる。けど、ねーちゃんは海外に留学してて、にーちゃんは仕事でどっかの島にいる」

沈黙が訪れる。行成は自分よりも過酷な境遇にいる年下の子供に對し、どういった言葉を掛けたいのか見つからないでいるようだ。

だけれども、真咲の方としても、特に同情を引きたかった訳でも、慰められたかったわけでもない。ただ、自分のことをもつとよく知ってもらいたかったただけだ。

真咲は気まずい空気を打ち消すようにわざとちよろちよると動き回った。そこで、机の上に見慣れないガラス瓶を見つけ、それに近づいてから指をさした。

「ユキナリさん、これは？」

真咲の質問に、行成が「さん付けしなくていいよ」と前置いてから答える。

「これは『透明骨格標本』って言って、サカナの身の部分を薬で溶かして、骨だけ取り出して色付けたやつだな」

「へー……、キレイ」

ガラス瓶の中には、見事に着色した魚の骨がぷかぷかと漂っていた。まるで透明な海を泳ぐ魚の幽霊のようなそれは、骨の色が青よりも濃くて闇に近い――真咲の好きな藍色だった。

口を開けて見とれていると、行成が首の裏を掻きながら言った。

「まだ試料あるけど、作ってみる？」

「これって作れるの？」

「あ、ああ。これはデカいから2ヶ月ぐらいかかったけど、メダカみたいな小さいのなら2週間ぐらいでできるぞ」

「どうやって？」

興味津々で行成を見上げる。すると彼はガラス瓶を手にとって説明し出した。

「まずはその辺で釣ってきた魚をホルマリンに漬けてだな」

「えっ、生きたまま漬けちゃうの？」

真咲が急に驚いたような声をだしたので、行成は「しまった」と思いつつ返した。

「……一応。死んだのでできるけど」

「ふーん……。ちょっと可哀想だね」

そう言う気持ちも分からなくもない。真咲はまだ「生き物の死」というものについて敏感になっているんだろう。

行成にしてみても、標本を作る際ゆっくりと弱っていく魚を見ながら、済まないことをしていると気分を何度となく感じた。

行成は「まあ、気が向いたらいつでも言えや」と言って瓶を机の上に再び置くと、真咲に座るよう促した。

その後は、「好きなことしてろ」という行成の言葉通り、彼の部屋にあった雑誌やマンガを勝手に読ませてもらった。彼は難しい顔をしてラップトップの画面を覗んでいたが、真咲が「うわ」とか「えっ」などと本の中身に反応するたび、「どれどれ」と顔を近づけて真咲が読んでいたものを覗き込んできた。その行動がなぜか嬉しくて、大してウケたわけでもないのに大声で笑ったりもしてみた。まだまだ帰りたくないな――、そう思っていたが、行成が壁に置かれた時計を見て、焦ったように口走った。

「やべ、もうとつくに6時過ぎてっぞ」

俺もいまからバイトなんだよ……とカバンに荷物を詰め始める。慌てたその様子を見て、真咲は時間を教えなかったことをいたく後悔した。

追い立てられるようにして玄関から出ると、行成が「ちょっと待て」と声を掛けてきた。

「まだ雨降ってるから、傘持つてけ」

白い柄のビニール傘を差し出される。行成は自身も靴を履きながら、カバンを小脇に抱えていた。

「それじゃ、今度返しに……」

「いや、いいよ。それぐらいやるよ」

そう言つてドアノブに鍵つつこんで回した。ひどく急いるようで、彼は「それじゃ」と言つと、真咲の方を振り返らずに駅の方へ早足でアパートの階段を駆け下りた。

紺色の大きな傘が遠くなる。完全に見えなくなると、真咲はため

息をついてビニール傘を払げてアパート前から立ち去った。

雨は夜には上がり、都会の夜空にもぽっかりと円い月が昇った。

しかし真咲は、今日はいつものように空を見上げる気にはならなかった。

（『そんじゃ、さ。ちょっとお前うち来る？』）

行成の声が耳にこだまする。自分はその誘い通り、行成の家で何時間か過ごしてしまった。

なんだかよく分からないけど未だにドキドキする。だけどきっと誰かに知られたら台無しになってしまいそうな気がする。

だからこのことは、絶対に秘密にしたい。母親はもちろん、友達にもおじさんにも、そしてお父さんにも――

その日は、引っ越してきてから月に祈らなかった初めての日になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9963w/>

静かの海

2011年10月14日01時59分発行